

一点で未来が変わる

岩手県盛岡市立上田中学校

二年 泉水 文

「察してください。」

「氣遣い」ということを改めて感じた時だった。この言葉はもう知り合って八年の親友に言われた。あまり覚えていないが広い部屋でテレビをつけた。そのテレビは大きくて後ろに下がって見るのがちょうどいいぐらいだった。そのときに言われた言葉だった。彼女はあまり目がよくない。分かったうえで友人として付き合っていたつもりだった。でも、気づけなかった。悔しかった。自分に呆れた。彼女が自分からどうしてほしいか訴えてきたのは初めてだった。そのぐらい気になったことだったのだろう。か、分かっていなかった私を嫌いになってしまったかと色々なことが頭の中を駆けめぐった。彼女のことを分かりきっているところまで自信があった。その自信が裏目に出た。分かっていっているつもりで、対処や気配りが何一つできていなかった自分が恥ずかしかった。何も知らないということが人を傷つけることになるかと初めて知った。

あの時から何年か経って中学生になった。悔しさ、恥ずかしさは残ったまま。そんなある日、父から手伝ってほしいと言われ、ステンレスの板に杵が縁どられているもの、スポイトのような小さな棒、い

つも使う紙より少し厚い紙を渡された。全盲の夫婦に手紙を書いてほしいということだった。全盲ということはやはり目が見えない。父はその夫婦に点字で手紙を送ろうと思ったのだそうだ。そんな大切な役を託された。点字というのは読むのも打つのも大変である。私が知っているかぎりでは点字が必要な人達は大きく二つに分かれる。だんだんと目が見えなくなっていく人、生まれた時から目が見えない人である。前者は見えなくなった時のために点字を勉強するようだ。しかし、後者は生まれた時から見えな

い人はまず点字の形は分からない、最近だと高齢者の方がカタカナの点字が分からないという現状があるそうだ。夫婦は後者だった。そのため読みやすいように丁寧に打った。できあがった手紙を出した。数日後、内容が伝わったことを知らされた。嬉しいというひと言が頭の中にあつた。人に何かを伝える手助けができたということ、自分が打った点字が伝わったということがただ嬉しかった。そんな中、あることに思いが巡った。あの子のことだ。彼女のために点字を勉強しようと思った。点字を学ぶことで全盲など視覚に障害がある人の気持ちが分かると思った。

そして今、中学二年生の夏。本を買って勉強を始めた。まず目に飛び込んできたのは筆者の言葉である。「この本は売れないのではないかと編集社内で話になった」と。点字や全盲について理解しようとする人が少ない現実がそのひと言につまっていた。そんな言葉を押し切って、分かってほしいと出版したと続いていた。次に点字の歴史、つくりが書いてあった。外国でできたもの、一文字の大きさが指のほら一つ分にできているということ。人は目によって判断できる情報は九十パーセント以上だということ。その情報が遮られた状況を補うためにできた点

字は思いやりの塊のようなものだった。夏休み中は、ずっと点字を打ち続けた。あの子を思いやることができるようにという気持ちに加え、これから使っていけるように、もっと幅広い人に情報が伝わる手助けができたと思うようになっていった。

今まで何をやっても中途半端だった。続かなかった。続けなかった。自分に甘かった。こうなりたいと願う、思うだけで何もしなかった。そんな自分を変えてくれたのも点字だった。自分のために勉強する事と、人を思っ

て勉強することは、自分にとって

も相手にとっても支えになることが分かった。何で勉強しなければいけないのか。これからの生活をより充実させるため、自分の周りの環境を良い方向へ導くためだと思った。ひらがなを習っていなければ、「あ」という点字は打てない。昔と今では社会的にどのような点が成長したか、人々の意識がどこへ向いていたか分からないと、自分、周りの人の環境を変えることはできないと私は思う。自分の考え方を

変えるような大きなきっかけとなった。これまでの自分の考えを改め、生活の意識を変えようと思えたことが成長を感じさせた。

「察してください」この言葉は、悔しい、恥ずかしい思いをした言葉だった。しかし今では自信が出る言葉である。今の私ならこの後、「はい、分かりました。」と堂々と言える。点字は一点打つだけでは伝わらない。増えることによってより多くのことを伝えることができる。一点一点打つ度に伝わる相手が一人一人増えていく。一点、一点――。この先の自分、私の周りの人のために打っていく。そんな思いを胸に今もまた一点打つ音が続く。